

春の渡り鳥

三年 佐藤 恵美（昭和五五年度）

渡り鳥というのは、いつか時季が来るとその島から離れる。そう、それは春なのかもしれない。私達も同じ渡り夕鳥なのです。学校に入って十年目の春には、両親の手元から離れなければならぬ。私の場合、いやでも離れなければならない。それは、自分の夢があるから。実現させたいから。親に恩をかえしたいから。それは高校にまず入らなければできません。私が立派に一人立ちできる頃は、もう父も母も六十才を越えます。

父は問う。「どの高校に入る?」、夜になると同じ言葉がくり返される。「よくわからない」と私はいつもの調子で答える。そのうち、父は「商業の定時制はどう?」と言う。

私も真剣に考えた。働きながら学校に通えるだろうか。経験者に聞くと「みんな疲れて居眠りだっけ……。」と。だが父は本気で言っている。はたして私にそんな事ができるだろうか。だんだん私も不安におちいつてしまつて、何をどのように考えたらいいいのかわからなかった。毎日毎日不安が募るばかりである。

渡り鳥なら誰でも考えることでしょう。聞いてみると、私

の姉もそうだったんです。

しかし、その傷を早く治さなければ飛べません。私には今、誰もが足をいためている鳥のように思えます。私を含めてですが、瞳に輝きがありません。真剣さが無いのでしょうか。傷の深さを知らないでいるせいなのか。それとも……。

今私は、何かを失い、また何かをみつけたような気がします。足の傷を治す一つの方法かもしれない。いつだったか今は記憶を失ったけど、「ああ、これなんだな。」と思つた時があつたのです。その宝物まだ秘密です。自分が本当に確信を持つて言える時、その時はみなさんに聞いてもらいたいと思つています。

その時こそ私の第一歩目になるかもしれない。だからその出発前に飛べるように今は苦を惜しまない。「若者なら立ち止まる前に飛べど、青春を置き去りにして、走り続ければ朝もう一度来るだろう。ためらいをすてて……。」、そんなことを自分に言い聞かせて、これからの長い旅を“乗り越えた”と思います。だから先生方をはじめ、両親もだまつて私達二十三羽を見守つてほしい。